

安全への提言

|||||



真摯に取り組むために

くわ 桑 名 一 徳†

12年間勤めた大学を先日退職したのですが、その際に真摯に取り組むことの難しさ、そして大切さを痛感しました。個人的な話になり恐縮ですがこの場を借りて書かせていただきます。

私は物事に割と真面目に取り組むほうだと思います（自分でいうのも何ですし、異論も多いかもしれませんが）。たまには締め切りを守れずご迷惑をおかけしてしまうこともあります。何事においても少しでも良い結果になるように努めている……つもりでした。

自分でも驚いたことに、退職が決まってからというもの、業務をするときに「まあ、いいか」という気持ちが湧き上がってくるのを抑えることができませんでした。これまで、たとえ恒例行事であっても、より良くするためにはどうすればよいか考えながら作業していたのですが、「前例通りにこなしておけばいいな」という発想になりそうになっていました。幸いそのような気持ちの変化を自覚できたので、しっかり取り組むように自分に言い聞かせながら過ごしていました。

しかし、いよいよ退職の日になり、この職場で働くのも今日で最後かと感傷に浸っていたら、緊急の会議に呼ばれたのです。ある問題に至急な対応をするのですが、少し丁寧さに欠けていました。もちろん表面上はきちんとこなしましたが、普段ならもっと丁寧に対応したであろうことは他ならぬ私が一番わかっています。辞めるその時まで真摯に取り組むことは本当に難しいことでした。

政治のニュースでレームダック状態などと解説されることがあります。辞めるとわかっている政治家の影響力が低下して生じる停滞状態ですが、その政治家本人のやる気が低下することも関係しているように思います。

安全への取り組みには色々な形がありますが、真摯に取り組まないと効果はほとんどないでしょう。私は大学でしか働いたことがないのですが、記録を残すた

めだけの安全点検や、印刷して置いてあるけど誰も読まない安全データシートなどは、大学ではよくあることだと思います。これらは、いざ事故が起きたときに、安全対策をしていたという言い訳に使える程度の価値しかないと思います。

しっかり安全に取り組んでいる職場では、安全についての率直なコミュニケーションがあるでしょうし、問題があれば解決方法が真剣に議論されるでしょう。このような環境では多くの人が真摯に安全に取り組んでいます。レームダックとは反対の状態であり、リーダーシップが重要な役割を果たすでしょう。

安全活動でつい手を抜いてしまう理由の一つとして「何がどの程度危ないのかわからない」ことが挙げられます。新型コロナウイルスへの対応で緊急事態宣言の効果が限定的だったり、ウイルスのことを全く気にせず飲み歩く人がいたりするのも同じような理由だと思います。災害におけるリスクコミュニケーションに関する課題を改めて認識させられました。

この負の状態を打開して皆が真面目に取り組めるようになるためには、安全研究を進めて現象の科学的な理解を深め、さらには安全情報を広く発信することが重要だと思います。多くの課題がある今だからこそ学会が果たせる、そして果たすべき役割があるように思います。

私は、いま学術委員会の副委員長をしています。今年度の研究発表会は一部または全体がオンライン形式と予想されます。前回の経験はあるものの、まだまだ手探りで準備しているというのが正直なところです。お気づきの点やご要望等がありましたら実行委員会までお寄せください。

安全研究を通して様々な事象に関する理解が深まり、研究発表会等で意見交換や議論をすることが、より安全な社会への重要な道筋だと信じて、真摯に準備に取り組んでまいります。

† 東京理科大学 理工学研究科国際火災科学専攻：
〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641